慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.9, (2009. 8) ,p.7- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000009-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	タイトル
5月23日	人間知性研究センター （2009年4月1日開始） 独立行政法人　理化学研究所 脳科学総合研究センター	「人間知性研究センター」キックオフ・シンポジウム ～人間知性の統合的理解を目指して～
5月31日	脳と進化班	MRI特別安全講習会
6月8日	哲学・文化人類学班	The Mass-Count Distinction　— Philosophical, Linguistic, and Psychological Perspectives
6月24日	哲学・文化人類学班	医療人類学の最前線Ⅲ：家族・医療・政策
7月1日	研究発信支援プログラム	NIRS空間解析の実践

研究員紹介

田谷文彦

近年、神経経済学と呼ばれる分野が注目を浴びています。経済的な選択を行う際の神経活動を調べることで、意思決定を支える神経機構を解明することを目的としています。意思決定には、感性的な側面を司る大脳辺縁系と、論理的な思考を司る前頭葉を中心とした神経ネットワークの双方が関与していると考えられます。現在は、報酬が確率的に決定されるギャンブル課題を行っているときの脳活動を脳波計で計測することで、報酬の学習における役割について研究を行っています。特に、前頭葉と大脳辺縁系の中間に位置し、行動調整や金銭的な報酬の受け取りに関わっている前頭皮質内側部の役割に注目しています。今後は、機能的磁気共鳴画像法の利用や、多変量解析の応用を通して、総合的に、意思決定に関わっている神経ネットワークを解明したいと考えています。

モハーチ・ゲルゲイ（Mohácsi Gergely）

1年半前から共同研究員としてGCOEのプロジェクトに参加させて頂きましたが、7月より「哲学・文化人類学班」の非常勤研究員になりました。博士論文研究において、科学技術による身体化の問題を考慮しながら、慢性疾患のセルフケアを可能にし、人間の多様性を再構成しつつある医療技術をとりまく諸実践を民族誌の方法を用いて分析してきました。この試みの主な目的は、糖尿病の治療で応用されるさまざまな医療テクノロジーに焦点を当てて、今日の日本社会において正常と異常の生物学的差異化の文化的相違との関係はどのように技術的に媒介されているのかを明らかにするということです。本グローバルCOEでは、数値の論理をもたらす血糖値と感性として理解されてきたストレスという病気の2つ側面を組み合わせる治療法を人類学の視点からアプローチしていきたいと考えております。また最近このような問題意識を糖尿病における再生医療の現状と未来への理解につなげることも検討しています。

日根恭子

非常勤研究員の日根恭子です。私は、顔の認知に関する研究を行っています。私たちは、顔を記憶する時、全体的処理と部分的処理の2種類の処理を行っていると考えられています。多くの場合、全体的処理を多く用いることが顔の記憶には有利であると考えられていますが、全体的処理を多く用いることが難しく、結果として部分的処理に依ってしまい、記憶エラーが生じると解釈することのできる研究が報告されています。私たちにとって、2種類の処理をバランスよく行うということは、場合によっては難しいのかもしれません。現在私は、顔の記憶課題の前にどのような作業をすると、全体的処理よりも部分的処理を多く用いて判断してしまうのか、行動実験を通じて検討しています。2つの処理をどのように用いているのか、その様相を探ることは、本G-COEの研究課題である「論理と感性」の関係を明らかにすることへ貢献できると考えています。

植村玄輝

私の研究テーマはエトムント・フッサールの現象学です。フッサールの独自性は、われわれ自身がその一部である世界のあり方を明らかにするために、〈概念能力と感性的能力によってわれわれが世界に関係する仕方〉に着目した点にあります。ただし、ここでの「われわれ」が意味しているのは、自然種としてのヒトに限定されないような、概念能力と感性的能力を備えた存在者一般のことです。したがってフッサールは自身の現象学を、われわれの経験が備える一般的構造を分析対象とした、心に関するあらゆる経験的研究から独立した学科と考えます。しかし、しばしば「アプリオリズム」と呼ばれるこうした発想が本当に維持可能なのかということは、フッサールの同時代および現代の哲学において、重要な係争問題の一つです。私の研究は哲学史的考察に重きを置いていますが、その一方で、こうした係争問題に哲学史的考察を通じて取り組むことも目指しています。